

人文科学論集

第37・38号合併号

1991年3月

野外教育の定義とその考え方について

—— フィリス・フォードの野外教育論を中心として ——

星野敏男

はじめに

現在、日本の野外教育（Outdoor Education）の分野においては、環境教育、自然保護教育、冒険教育、体験教育、野外レクリエーションなど、野外教育に関連する言葉としてさまざまな用語がさまざまな形で使われている。これらは時には同じ意味で用いられ、時には全く異なった意味で用いられる場合もある。中でも最近盛んに使われるようになってきた環境教育という用語についてはこれまで使われてきた野外教育に対して時には上位概念として使われたり、また時には下位概念として使われるなど両者の関係が曖昧なまま使われているのが現状である。これは一つには野外教育の扱う分野が非常に複雑多岐に渡っていることとさらにはさまざまな分野の指導者がそれぞれの立場で野外教育の指導に携わってきていることが大きな原因となっている。

野外教育に関わる関連用語はそれぞれが野外教育の歴史的発展過程の中で生まれてきたものであり、それぞれの用語の本来の意味を明確にしていくためにはまず野外教育の基本的な定義とその考え方を明確にし、その上でそれぞれの用語が複雑な要素を持つ野外教育のどの部分と密接な関わりを持っているのかを明らかにしていく必要がある。ここでは野外教育（Outdoor Education）の定義として用いられることの多い Outdoor education is education in, about, and for the outdoors という定義を中心にして野外教育とそれを取り巻くさまざまな関連用語との関係について論じてみたい。

1. 用語としての「野外教育」が出現する時代背景について

野外教育は学校教育のカリキュラム内容を充実させるための一方法であるとか学習を進めていく上でのアプローチの一つであるとして学校教育と深く関連した用語として考えられている。しかし本来は1940年代から1950年代にかけてそれまで行なわれていたキャンプと学校教育を深く関連付けるものとしてアメリカで使われるようになったものである。当時野外教育界のリーダーであった

L. B. シャープがそれまで使われていた *Camping Education* や *School Camping* に代わるものとして使い始めたものであり、同じく後の野外教育をリードしていくジュリアン・スミスが広く教育界に定着させていった用語である。当時からアメリカでは長期の夏季休暇を利用した一カ月や二カ月に及ぶサマーキャンプが盛んであったがこれらはいずれもプライベートに運営されているものであり学校が主催となつて行なうものではなかった。自然の中で行なわれるキャンプに多くの教育的意義を認めた初期の指導者たちは次にこれらをなんとか学校の中に定着させようと努力しはじめた。しかし、地域住民の税金で運営されているコミュニティースクールの中にキャンプを定着させていくためにはレクリエーション的な内容が多かった *camping education* や *School camping* の内容を変えるとともに名称も変えて地域住民の同意を得る必要があったため、学校教育的なイメージの強い野外教育という用語を用いるようになっていった。学校や公共機関、青少年教育団体などの主催で行なわれるキャンプや宿泊体験等が野外教育と呼ばれるようになっていった背景にはこのような事情が存在している。そのため、そのころ野外教育と呼ばれていた主にキャンプを中心とした活動を見てみると、当時から既にレクリエーション的なアウトドアスポーツを中心としたものと学校教育のカリキュラムに関連したものを中心としたものの二つの傾向があったことがわかる。今日、野外教育の定義とその考え方、特にその目的についてはさまざまな解釈がなされているが基本的にはこの当時の野外教育に関する考え方の相違がそのまま現在に及んでいるととらえることができよう。

2. 野外教育の定義について

これまで、野外教育については数多くの概念規定がなされているがそれらを広く統括した野外教育の定義として最も多く用いられているのが *outdoor education is education in, about, and for the outdoors* という定義である。(この *outdoors* の部分を *out-of-doors* とする定義もよく見受けられるが一般には *outdoors* の方がよく用いられている。この点に関しては後の章で触れる。) この定義は野外教育の行なわれる場所やその扱う内容、目的を最も簡潔に表しているものとしてよく使われるが逆にその簡潔さ故にさまざまな解釈がなされており野外教育を考えるうえで混乱を生じさせる原因ともなっている。以下にあげた文章は E R I C (Educational Resource Information Center) の刊行物に掲載されている野外教育の定義とその考え方に関するものの一部である。この E R I C の野外教育に関する定義は野外教育の内容を最も良く表しているものであるとして、1986 年、野外教育審議会に採用されたものである。野外教育審議会 (Council on Outdoor Education) は 1960 年代に発足し、当時の審議会の正式名称は *Council on Outdoor Education and Camping* で *Camping* という用語も含まれていた。しかしその後、良く考えられたキャンププログラムはそれ自体が野外教育そのものを例証するものであるということから *Camping* という用語を外して現

在の形になった。フィリス・フォード女史はこの審議会の中心的な人物の一人であり、*Principles and Practices of Outdoor/Environmental Education* の著者としてもよく知られている。以下にあげた定義は彼女がその著書の中で展開している野外教育論を強く反映した内容となっている。

Adapted from the Council on Outdoor Education Position statement

現在、野外教育に関しては全国的に標準化されたカリキュラムはまだ存在していない。また、野外教育に関する知識や能力の測定方法も標準化されていない。しかし、野外教育プログラムは現在、小学校、中学校、短大、総合大学、ユースキャンプ、各地のレクリエーション局、企業等で広く用いられている。またそのプログラムを指導する者は、小学校の教員、体育教員、生物学者、資源管理者、レクリエーション指導者などさまざまである。彼らはいずれも野外教育プログラムを提供しており、彼ら自身を野外教育者であるとみなしている。野外教育はその範囲が学校からレクリエーション局、青少年関連団体、自然保護団体、資源管理局など社会のさまざまな局面にまで及んでいる。そのため野外教育はさまざまな観点からさまざまな定義付けが行なわれる結果を招いている。

野外教育に関してはいろんな定義付けが行なわれているが、それらのなかでも最も包括的なものとしては以下の定義をあげることができる。

“Outdoor education is education in, about, and for the out of doors.”

この定義には、①学習が行なわれる場所、②教えられるべき内容（テーマ）、③活動の目的が実によくあらわされている。

カナダやオーストラリア、イングランド、そしてアメリカの人々にとっては野外教育とはハイキングやキャンプ、カヌーなどのレクリエーション的な活動をさすとともにカリキュラム内容を充実させるための方法、体験学習のためのプロセスであると考えられている。ある人は場所を指すといい、またある人は教えられるテーマ・内容を指すと言う。野外教育は広くはカリキュラムや行動、レクリエーション、自然保護、あるいはまたキャンプやサバイバル的な内容をも含んでいる。

しかし、最も中心となるべきものは野外に関する教育、すなわち *about the outdoors* ではなかろうか。そしてその肉付けとして自然の中で (*in*)、私達を取り巻く世界に関する知識・技術・態度を発達させることを目的 (*for*) に行なわれる教育としてとらえるべきではないだろうか。

この定義における (in) とは、野外教育が行なわれる場所を示しており、野外教育が工場に囲まれたような学校の校庭はもちろん遠く離れた大自然の中まであらゆる場所で可能であることをあらわしている。空き地や公園、污水处理施設、動物園などさまざまな場所は直接体験やテーマへの直接的かわりあい、相互作用や社会化の助けとなる。

(about) は野外教育で扱うテーマは何かを示しており、そのテーマは自然そのものや国民の生活環境に関連した文化的側面を扱うものである。ここではあらゆることが教えられる。数学、生物学、地質学、コミュニケーション論、歴史、政治学、芸術、身体技能、そして忍耐まで。しかし、これらの学習は全て野外という状況の中で行なわれる。ここでは土壌や水、動物、植物といったものが

この学習の基礎的な部分を構成するであろうが、同時に子供達は普段人々がレジャーとして行なうような活動も体験したり学んだりさらには生態系に対して人間がとるべき道を調べたりもするであろう。つまり、そこで扱う教育的テーマはあくまで自然環境に関するものではあるが、その主眼とするところは自然と人間双方に関する全体的な関係や我々の世界を大切に扱う態度の育成、人間の生存やレジャー活動のための自然資源の活用方法や技術を学んでいくところにおかれている。広い意味で解釈するならば野外教育で扱うテーマは、我々の社会が拠り所としている自然資源と人間との交互作用を学ぶことにある。

野外教育はまた、社会的な動きや歴史等も含めた文化について学ぶ機会も提供する。廃墟となった農場や製粉所を発見したり、墓石に刻まれた碑文や年代の分析、庭に植えられている植物と野性の植物との比較など多くの文化的なことを学ぶことができる。子供達はまた、開拓者たちの残した道や彼らの住居をたどることによりアメリカインディアンの国土への影響力などを学ぶことにより文化的な遺産に関する知識と感謝の念を高めることができる。また自然資源を利用するのか残すのかといった社会問題や社会的な意志決定を通じても同時に文化とは何かといった点に関して学習することも可能である。

(for) は野外教育の目的が自然の生態系それ自身のために学習領域における知識・技術・態度の分野を実行していくことを示している。すなわち、自然資源の永続のための自然の理解と自然の有効な利用と自然に対する感謝とを意味している。(訳および要約、下線は筆者)

以上が野外教育の定義とその考え方として最も広く認められ、使用されているものである。この定義の中には学習の行なわれる場所、テーマ、目的が含まれていることがわかるが、それらは非常に広範囲にわたっており、極論すれば野外教育を指導する者の立場に応じてどのようにでも解釈が可能な定義であるということが出来る。

3. 立場の違いによる野外教育の解釈について

野外教育という用語が出現する時代的背景については先に簡単に触れたが、現在では野外教育という用語以外にもさまざまな関連用語が用いられており、それぞれの中で野外教育活動が行なわれている。それらの用語を簡単に整理すると次ページのように表すことができる。

ここにあげたものはいずれも野外教育の要素を含むものとして、あるいは野外教育そのものとして用いられている用語である。いずれも多く共通する部分を含んでいるが微妙に異なっている部分もある。その違いは野外教育の定義の中の in, about, for のどの部分を強調するかの違いによって生じてきているものと思われる。定義の説明の中でも述べられているようにこの in about for は、本来野外教育の行なわれる場所と扱うテーマとその目的をあらわすものとされているが、野外教育の内容が多様化するとともに複雑に変化してきた現在では、この in, about, for をそれぞれ独

school camping		outdoor education
camping education		environmental education
school-in-the-wood	⇒ outdoor education ⇒	adventure education
resident outdoor school		experiential education
outdoor recreation		conservation education
		acclimatization
		nature game

Education in, about, and for the outdoors.

立したテーマあるいは目的そのものとしてとらえた方が野外教育をより理解しやすいものと考えられる。

日本でもこの in, about, for についてはさまざまな解釈がなされているが、やはりこれらのうちのどの部分を強調するかにより、野外教育の内容に微妙な違いが生じている。日本で行なわれている野外教育は、大別すると一般には次にあげる五つに分けて考えることができる。

- (1) 体験を通して五感に直接働きかける「野外における教育」
- (2) 共同生活やさまざまな活動で個人を伸ばすような「野外を用いての教育」
- (3) 教科にこだわらず自然について総合的に学ぶ「野外についての教育」
- (4) 人間と自然との望ましい関係やあり方について学ぶ「野外を理解するための教育」
- (5) 野外を楽しむ技術を学ぶ「野外を有効に利用するための教育」

このように同じ野外教育といわれるものであっても、定義の中の in, about, for のどの部分を強調するかによって自ずとその扱う内容や活動内容に違いが生じ、その違いがさまざまな解釈の相違をも生み出す要因ともなっている。先にあげたいくつかの野外教育関連用語についても微妙な違いがあると述べたが、ここではそれぞれの用語の違いについて in, about, for との関連から検討してみたい。

(1)と(2)の「野外における教育」と「野外を用いての教育」は Education in the outdoors の部分を強調したものであり、(2)の場合はどちらかというと in よりも by の意味合いに近いものである。ここ数年、日本でも盛んに行なわれるようになってきたネイチャーゲーム (nature game) やアクラマティゼーションプログラム (acclimatization) は(1)の in を強調したプログラムであり、直接肌で自然と接することや自然を味わうことを強調したものである。一方, adventure education や experiential education は(2)の野外を用いての教育を強調したものであり、多くの冒険的な活動やチャレンジプログラムがその活動内容の中心となっている OBS (outward bound school) などがその代表である。また、最近盛んに行なわれているイニシアチブプログラムはその多くが冒険的な要素を含んでいるものの、最終的には個人のリーダーシップ能力や仲間同士のコミュニケーション、人間関係の向上をめざすものとして扱われており、この(2)の部分に相当すると考えることができよう。ただし、experiential education の方はもちろん冒険的な内容をも含んではいるものの初期の

シャープ達が唱えた *learning by doing* の流れを汲むものであり、その意味では(1)と(2)がミックスされたものとしてとらえることができる。

(3)は *Education about the outdoors* を強調したものであり、その代表的なものとして環境教育 (*environmental education*) をあげることができる。冒頭に環境教育は野外教育に対して時には上位概念として考えられたりまた時には下位概念として考えられたりもすると述べたが、もともとは野外教育の定義の中の *in, about, for* の中から *about* の部分が特に強く打ち出されてきたものとしてとらえることができる。

アメリカにおける 1950 年代までの野外教育はどちらかというと キャンプ教育やレクリエーション教育の傾向が強く、言わば *education in and for (use) the outdoors* という傾向が強く、*about the outdoors* 的な内容はごくわずかであった。しかし 1960 年代の後半頃より環境破壊や環境汚染が国家的、さらには地球的な規模で問題視されるようになり、野外教育もその影響を強く受け内容も環境問題を扱うものが多くなっていった。当初は自然環境そのものを扱うことが多かったが徐々に人口問題やエネルギー問題、人権問題等も扱うようになり、今では人間を取り巻くあらゆる環境を扱うようになっている。先に定義のなかの *outdoors* の部分を *out-of-doors* としている定義もあると述べたが環境教育的な内容の濃い場合にこの表現が用いられていることが多い。環境教育を野外教育に対する上位概念としてとらえる考え方はこの環境教育の扱うテーマの大きさやその領域の広さがそれまでの野外教育のそれを大きく上回っているというところから生じてきたものである。

しかし、フィリス・フォードはこのような傾向の中にありながら今なお *outdoor/environmental education* という表現を用いている。その理由として、「野外教育の目的 *for the outdoors* にはもともと二つの意味が含まれており、一つは野外の理解、もうひとつは野外の有効な利用があげられる。」と述べ、環境が強調されるあまり野外教育が本来持っていた *outdoor* を有効に利用するための教育や自然の中での冒険的な活動や共同生活を通じてのさまざまな効果を決してないがしろにするわけにはいかない点を強調している。環境教育は基本的には野外教育の *about* の部分が大きく強調されたものであるがその根底には依然として *in the outdoors* や *for the outdoors* が含まれていることを忘れてはならないであろう。アメリカでは今なお *environmental education* としてアウトドアレクリエーションや冒険的なプログラムも実際に行なわれている。日本でも近年環境教育という用語が盛んに使われるようになり、また、日本の野外教育の現場に今最も欠けているものの一つとしてさまざまな環境教育的プログラムも行なわれるようになってきた。しかし、日本の場合は環境教育といった場合、たとえば乱開発による自然破壊の防止や環境汚染の防止など、ある特定のイメージとしてとらえられがちである。環境教育はたしかにこれまでの野外教育をも包括するような大きな概念として考えられるべきではあるが、基本的には環境教育は野外教育にその出発点があるのであり、現在日本で考えられている環境教育をそのまま野外教育と同じものとして考える考え方にはある種の危険性が含まれていると言わざるをえない。

(4)と(6)は、Education for the outdoors を強調したものである。ただし、この for には for understanding the outdoors 「野外を理解するため」と for use the outdoors 「野外を有効に利用するため」の二つの意味が含まれている。アウトドアスポーツやアウトドアレクリエーションをその中心的な指導内容としている人々にとっては「野外を有効に利用する」ことを指導していくことが大きな目的であり、一方生態学や自然科学的な内容を指導している人々にとってはあくまでも「野外を理解する」ことが目的となっていく。現在アメリカの野外教育が先に触れた about とともにこのうちの understanding the outdoors をその主な目的としてきわめて環境教育的な内容になっているのが特徴であるのに対して、日本で行なわれているキャンプ等を中心とした野外教育はどちらかと言えば for use the outdoors が中心となっており understanding the outdoors の方にはこれまであまり重きが置かれていなかったのが実状である。最近では日本でもこれまであまり取り上げられることの少なかった環境教育的なプログラムが多く行なわれるような傾向になりつつあるがアメリカでは逆に環境教育は既に一個の独立した存在として一人歩きを始めており、野外教育の現場では再び冒険教育や体験教育、特にそれらを通じての人間教育が見直されるような傾向になりつつある。

ま と め と し て

以上簡単にではあるが、野外教育はそれを指導するものの立場やその指導内容によりさまざまなとらえられ方がなされていること、また、野外教育に関連するものとしてさまざまな用語が使われているがそれらは野外教育の定義の中の in, about, for のどの部分を強調するかによって微妙な違いが存在していることを述べてきた。

しかし、どのような立場あるいは指導内容であれ野外教育には教育としての本来の目標がある。それは指導を受ける者の知識 (knowledge) と技術 (skills) と態度 (attitudes) の育成ならびに変化向上であり、そのための学習の場として野外を用いる方法が野外教育の本来の姿である。outdoors に関する知識を重要視するならばその指導内容は環境教育的あるいは自然観察的なものになるであろうし、技術を重要視するならばアウトドアスポーツやアウトドアレクリエーション的なものになるであろう。また態度を育成することを重要視するならば、自然を大切に扱うという観点からは自然保護的な内容になるし、個人や仲間との関係を育てるといった観点からは冒険的な内容や共同生活に重点を置いた内容となっていくであろう。この知識と技術と態度のバランスは指導者の考え方により異なるためそこで行なわれる野外教育の内容はそれぞれ異なった様相を示してくる。しかし、野外で行なわれる総合的な教育といった観点から野外教育を考えるならば、教育の目標であるこの知識、技術、態度の三つの要素を必ず含んでおくことが最も大切なことであろう。

参 考 文 献

- ERIC: OUTDOOR EDUCATION-Definition and Philosophy, Adapted from the Council on Outdoor Education Position Statement. JOPERD February 1989.
- Ford, Phyllis M.: outdoor education. JOPERD February 1989.
- Ford, Phyllis M.: Principles and Practices of Outdoor/Environmental Education. John Wiley & Sons, New York 1981.
- Hammerman, William M.: Fifty Years of Resident Outdoor Education. American Camping Association, Martinsville, Indiana, 1980.
- Smith, Carlson, Donaldson, Masters: Outdoor Education. Prentice Hall, 1972.
- 石田裕一郎・斎藤保夫編: 現代野外教育概論 海声社 1986.
- 江橋慎四郎他: 野外教育の理論と実際 杏林書院 1986.
- 拙稿: アメリカにおける野外教育の歴史と展望 レクリエーション研究 第16号 1986.